

研究報告

立位で足を踏みしめる活動の高まりに伴い、外界との応答に拡がりが見られた重度・重複障害児の事例に関する一解釈*

—Wallonの発達論の視点から—

熊川 宏昭**

本研究では、一人の重度・重複障害 (profoundly multiply handicapped;以下、PMHとする) 児の指導において、開始時には、全般的に不活発であったが、援助して立位をとらせると、徐々に足を踏みしめる活動が出現し、それに伴い外界との応答にも拡がりが見られたことについて、その相互の関連性を、指導記録のエピソードをもとに、Wallonの発達論の視点から検討した。

その結果、立位時に足を踏みしめる活動の高まりは、Wallonのいう「自己受容感覚」を高め、それにつれて「原初的主観意識」を引き出したことが示唆された。さらにこの「原初的主観意識」の中では、他者からの働きかけによって、「自己の感受性の中に他者性を認識する感じ」が発生し、これは、外界との応答の一つである相補的やりとりを促したことが示唆された。さらに、「自己の感受性の中に他者性を認識」する感じは、自己受容感覚の高まりとともに、自他の分化を促したことが示唆された。以上をまとめて、立位で踏みしめる活動と外界との応答についての仮説的結論を提起した。

キーワード：重度・重複障害児、発達連関、Wallon

I. はじめに

特殊教育における児童生徒が有する障害の重度・重複化、多様化が言われて久しい。今後、この傾向はさらに顕著となりうる事が確実視されている中、大切なのは、その子をどう理解するか、具体的に言えば、子ども (以下、こどもとする) の諸側面の力をトータルした“その子全体”をどのように理解していくかということと考える。換言すれば、「発達連関」(園原, 1961⁶⁾) という視点からこどもを理解していくことであると考え。

そのような全体としてのこども、つまり「発達連関」ということを考え合わせた場合、示唆に富む考えにWallonの提唱した理論がある。その特徴は、生理・心理・社会的な意味での人間の全体性を人格性として統一的にとらえようとし、精神

発生・発達というものを、自己の身体と対人関係の双方に規定されていることを解明し、理論化しようとした点、にあるとされている(亀谷, 1989⁴⁾)。

以上のような視点から今回検討するのは、一人のPMH児の事例である。本児は、指導開始時には、全般的に不活発な印象で、援助して立位をとらせても、力が入ることはあまりなかったのが、次第に踏みしめて力が入るようになり、それに伴い外界との応答にも拡がりが見られるようになってきた。

そこで本稿では、このPMH児の立位で踏みしめることと、外界との応答の2つの事柄の時系列的な変容の関連を、彼の理論に依拠しながら分析し、その意味について考察していくことを目的とする。

II. 方法

1. 対象児

指導開始時、CA 9歳のA児(男児)。疾患名は、髄膜炎後遺症、レノックス症候群。遠城寺式乳幼児分析的発達検査による発達年齢(指導開始後7

* Interpretation for correlation to stepping firmly on stand and response to external world on children with profoundly multiply handicapped—From perspective of Wallon's theory—.

** 福岡教育大学障害児治療教育センター研究部員(第1部門)
福岡県立田主丸養護学校

Table. 1 A児における立位で踏みしめると外界との応答の変容

エピソード	4	5	6	7	9	10	
<p>日 時</p> <p>101112151719232526 (第1期)</p> <p>1. 2. 1315232930 3 4 (第2期)</p> <p>173 9.1013171820 (第3期)</p> <p>2427 1 4 15161718 (第4期)</p>	<p>・左大腿と髌援助に変えると、何回か踏んで伸びることができる。 ・機援助で立たせた(背中側から右肘、尻、左大腿を持つ)。腰をはずしても立ち首も上がる。左大腿を左すねまでおろすと、右に流れてはいるが立って頭も上がる。 ・前に重心を移しても、まっすぐなろうとする。 ・後ろ援助。右肩、左肘援助で2回くらい腰が落ちた状態から踏んで伸び、首を上げられる。 ・腰がおちても、踏んで持ち上げることはよくできた。 ・肩援助のみでしばらく立位保持できる。 ・後ろ援助で腰援助ははずし、右肩のみの援助にする。腰は若干反り気味だが、踏んで立ち、ほぼ垂直位を保持できる。 ・横援助(いすを使って)、首、腰軽く援助して、3回自分で踏んで膝を伸ばし、腰が入ることが見られる。 ・左足で援助して、右→左→前→後ろへ踏ませる。首はいずれも垂直まではいかないが挙上する。力は2学期ははじめより入りはじめている。 ・中央で踏ませていると、2、3回目、ぐぐっと(じわっと)しかし、確実に下から上へ力が入る。 ・重心を中央へ持つてくると、首が1回、60度くらいまで挙がる。 ・1回だけ左肩援助のみで左のりできる(反張気味)。 ・援助は最小両肩まではずせる。 ・右に重心移動する力が入り、すつと立つことができる。その後、中央で1回立てる。 ・前、右、左、後ろ踏みしめ、前はよく力が入る。左1回だけ踏みしめ、足の裏全体で踏みしめられる。2~3分踏みしめて立つことができた。 ・3回くらい足に力が入りぐつと下から上へ力が入る。少し傾けると、腰も入って体全体がすつと伸びる。左に重心を乗せると、1回足の裏全体で踏むことができる。 ・横から援助して立たせる。1回全身に力がこもり、5秒くらい立位保持できた。 ・立たせた瞬間、反張のためか、全身が一瞬垂直位を保持する。 ・足が震え、つま先で立ち、力が入ってもびっぴっと緊張が入る感じ。</p>						
立位で踏みしめる活動							
働きかけへの							

<p>笑顔での応答</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>・今日からCDでディズニーの音楽を終始かけ始めた。仰向きで寝て、左45度くらいの方から、50～60cmの距離で聞いている。笑顔が見られる。再び見の右ななめ下1cmくらいにCDがある位置で聞いている。笑顔が見られる。曲が変わると笑顔になるようだった。</p> <p>・朝登校して、顔拭き等が終わると、仰向けに寝ている右下ななめから「Aくん」といいながらおそおちの周辺をくすぐると、ニコッと笑う。</p> <p>・座位で前後左右に少し押しながらかち直ってくる遊びで、ちよっと笑うことが1回見られる。</p>
<p>動作での応答</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>○</p>	<p>・登校して、仰向けでひざを曲げた状態でTが「お尻上げて」といって両腰を持って上げるように促すと、腰を上下に何回か上げたり下げたりする。</p> <p>・Tが修学旅行で買ってきたおみやげのタオールの袋を目の前に出してみせると、首をぐっとあげて見る。</p> <p>・水を飲ませている、2口くらい飲んで、「もういいね」「まだ飲む？」というときとタイミングよく手をたたく。また「まだ飲むね？」と再度聞くと、しばらく間があって手で自分の体をたたく。</p> <p>・おしっこが出ておむつを換えるとき、尻部のやや上を両手でもって「Aくん、お尻とヨーン」と何回か言うとき、尻部の上のやや中央部分あたりをぐっと力が入り、お尻が少しくっと持ち上がった状態になる。</p>
<p>音声での応答</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>・朝の会。お名前呼びで、他の子が2回ほど呼ばれると、「アー」と発声(あぐら座位)。同じくあぐらで「手をたたきましょう」の歌に「アー」「シー」の発声。</p> <p>・朝の会で「いぬのおまわりさん」を歌っていると、「ニャンニャンニャンニャー」のフレーズのところであぐら座位で、上体を上げて、「アー」の発声。</p> <p>・児(あぐらで両手を前につき、45度くらい上体を上げて)。首は下がっている(左ななめ前)からTが、2日前にいった社会見学の話を。「お魚見た?お魚好き?」の問いかけに、首がぐぐっと上がった、Tを見て、「アー」と発声。</p> <p>・午後から登校し、エレベータの中で「Aくん」と左横から声をかけると「フーン」と言いながら、手でテーブルの上を軽くたたいた。</p> <p>・2回目か3回目の排尿。「Aくん」と呼びかけると、「フン」という。便器を見たとおしっこ出ている。出たというサインの発声だったと感ずる。</p> <p>・今日も朝、登校時から目が開いている。「フンフン」といった発声が見られる。</p>

月時点)は、移動2か月～3か月、手の運動1か月～2か月、基本的習慣5か月～6か月、対人関係3か月～4か月、発語1か月～2か月、発語理解1か月～2か月であった。さらに具体的な発達の様相(指導開始時)は以下の通りであった。

運動・動作：日常的には仰臥位が多い。起こしてあぐら座位にし、両手をつかせて上体を起こそうとしても、首がうなだれたままで崩れてしまう。立位をとらせることは難しい。

環境の認知：仰臥位の状態で眼前に物を提示すると注視することがある。音に対する定位反応は、眼球が音源の方向へ動くことがある。仰臥位または援助したあぐら座位で物をつかませても自発的な操作行動は見られない。仰臥位で布を顔にかけてもとる様子は見られない。

身体の健康：一日中、眠ったようなうつろな状態で推移することが多い。

なお、本児は指導を開始する2年前に、転校してきたときまで、歩行していたが(それ以前は、「遊んで」という自発的な発語が見られていたという記録もある)、その後長期の欠席の後、現在の状態を呈している。

2. 分析資料

指導を開始した4月～10月までの6ヶ月間において、筆者が記録した本児の指導記録の中から、立って踏みしめる活動及び外界との応答に関連したエピソードを抽出した。なお、ここで言う外界との応答とは、人あるいは物の働きかけに対し、指導者が何らかの応答であると解釈したものである。

Ⅲ. 結果

Table. 1にあるように、抽出したエピソードを縦軸に、それが観察された日付を横軸にとり、交差したところをプロットして本児の変容を表した。なお、外界との応答については、(働きかけに対する)笑顔での応答、動作での応答、発声での応答、の3個に分類した。なお、Table中に(第1期)、(第2期)とあるのは、後述する、立位での踏みしめる活動の高まりの区分で時系列全体を区切ったものである。

以下、本児の変容を、エピソードのカテゴリーごとに概観してみる。

1. 立位での踏みしめ

まず、4月10日～4月26日くらいまでは、例え

ば、23日、25日のエピソードに見られるように、立位で、援助して一瞬立位保持できていたのが、5月に入ると、足の裏全体で踏みしめる(1日)あるいはその状態で2～3分立つことができるようになってきた(2日)。さらに6月中旬(17日)には、重心を中央に持ってくると、首が60度程度まで上がるようになってきた。続いて9月中旬(24日)になると、右肩だけを援助すれば、踏みしめて立ち、垂直位を保持できるようになってきた。10月前半(1日)になると、腰が落ちた状態から踏んで伸び、首を上げることができるようになってきた。そして、10月中旬(18日)には、左大腿とあごを援助すると、何回か踏んで伸びることができるようになってきた。

以上のことから、立位での踏みしめの時系列に沿った活動内容の高まりは、大きく分けて、次の4期に区分できるように思われる。

第1期(援助しての立位で全身に力が入り、保持でき始めた時期：4月10日～4月26日)、

第2期(足の裏全体で踏み始め、その活動が長く続くようになっていった時期：5月1日～6月4日)、

第3期(踏みしめて首が上がり始め、援助も少なくなっていく時期：6月17日～9月20日)、

第4期(腰が落ちて踏みしめて伸びたり、何度も踏んで伸びることができるようになった時期：9月24日～10月18日)

そこで、以下の外界の応答に関するエピソードは、上記の区分にそって検討していくことにする

2. (働きかけに対する)笑顔での応答

第1期では、中旬に指導者との遊びの中で、指導者がA児の身体を前後左右に傾けたり、くすぐったりすることに対しての笑顔が見られている。後半なってくると、CDの曲に対して笑顔、いわゆるものに対する笑顔が見られている。その後、第2期においては笑顔での応答は見られないが、第3期初旬に、指導者を追視して、遊びの中で、呼名に対しての順で笑顔が見られるようになってきている。しかし、第4期には笑顔による応答は見られていない。

3. (働きかけに対する)動作での応答

第1期では、初旬に、おむつ替えの際の声かけに対してお尻を持ち上げるような応答が見られている。その後第2期には見られていないが、第3期初旬には、水分補給の際に「まだ飲む？」とい

う指導者の問いかけに、手をたたく動作で応答することが見られている。さらに第4期では、第1期初旬と同じおむつ替えの場面で、「お尻上げて」の問いかけに、何回も腰を上下に動かすことが見られてきている。

4. (働きかけに対する) 音声での応答

第1期初旬には、呼名に対して「フン」と言うような発声が続けて3回見られている。その後第2期、第3期と全く見られていなかったが、第4期になると指導者の問いかけ、歌、他の子の呼名などに対し「アー」といった発声が見られてきている。

IV. 考察

1. 立位での踏みしめと外界との応答の関連

以上の結果から注目されることは、第1期から第4期へと、立位で踏みしめる活動が高まるにつれ、外界との応答が、第1期、第3期では、笑顔での応答及び動作や音声での応答のエピソードが散らばっているが、第4期になると動作、音声での応答のエピソードのみになってきていることである。

これについては、まず、第1期より、他者の援助を受け、踏みしめる活動の中で、A児の身体内部で、全身の筋の緊張、いわゆる自己受容感覚(浜田,1986¹⁾; 亀谷,1987³⁾,1989⁴⁾)が高まると同時に、「緊張性の収縮と感覚(自己受容感覚)を生理身体的基盤にもち、他者に介助されながら形成される姿勢(attitudes)」、すなわち「最初の感覚-運動複合体」(亀谷,1987³⁾)が形成されていったと考えられる。

それらを受けて、A児の内部では、自分の体に関する気づき(身体意識)が明確になり、「最初の感覚-運動複合体としての心身未分化な原初的主観意識」(亀谷,1987³⁾)が引き出されてきたと考えられる。つまり、A児内部の自己と他者の癒合状態が、自己と他者の分化へと一歩進んでいったと考えられる。また一方では、「原初的主観意識」を持ちながら、他者から働きかけられる中で、自己と他者のあいだにずれが生じ、A児は、「自己自身の感受性の中に他者を認識していく」(Wallon,1956⁸⁾)体験を積み重ね、自己と他者の分化をさらに進めていったと考えられる。

そしてA児の自己が身体的にも、認知的にも他者から分化してくるにつれ、基本的な外界への志

向性もだんだん高まり、その中で、他者との関係も、先ほど述べた自己自身の感受性の中に他者を認識していく段階から、第1期、第3期初旬によく見られるように、笑顔などの同型的(同じ形をとる; <子どもの生活世界>研究会,1986⁵⁾)な関係に至ったと判断される。さらに、そのようなプロセスの延長として、第4期によく見られるような動作、音声といった相補的(やりとり; <子どもの生活世界>研究会,1986⁵⁾)な関係が見られるようになってきたと考えられる。

以上の点をまとめると、A児においては、第1期~第4期までの立位での踏みしめによる自己受容感覚の高まりを軸として、相補的な関係が高まってきた第4期までにある程度の自他の分化ができてきたと判断できる。

2. 立位での踏みしめとその他の側面との関連

データとしては紙面の制約上掲げきれなかったが、分析対象期間当初の4月と、終末の10月との睡眠、排泄等の生活リズムの比較をした。すると、特に排泄において、4月当初は排泄をした全回数のうち、トイレで自排したのが、36.4%であったのが、10月には、53.7%まで高まっていた。これには、様々な手続きが影響していることはもちろんだが、一方では、踏みしめる活動が、先に述べた自己受容感覚を主とする自己受容系(浜田,1986¹⁾)のみならず、内受容系(浜田,1986¹⁾)にも作用し、内臓の動きを活性化し、一つの現れとして、先の自力排泄が高まったということも考えられよう。

V. まとめ

本稿では、あるPMH児、A児の立位での踏みしめと外界との応答について、Wallonの発達論の視点から検討してきた。

ここで、これまでのことをまとめて、本児の変化を仮説的に図式化するとFig. 1のようになると考えられる。ここにあるように、A児は踏みしめによる自己受容感覚のたかまりを一つの軸として、さまざまな変容をその内部で遂げてきたと解釈される。

さてWallonは、精神発達における自己身体と対人関係の流れ(亀谷,1989⁴⁾)を想定したが、A児の変容のプロセスはこの2つの流れ、すなわち踏みしめによる自己受容感覚の高まりの流れと、他者とのやりとりにおいて、自己自身の感受性の中に他者を認識していく流れを改めて確認させる

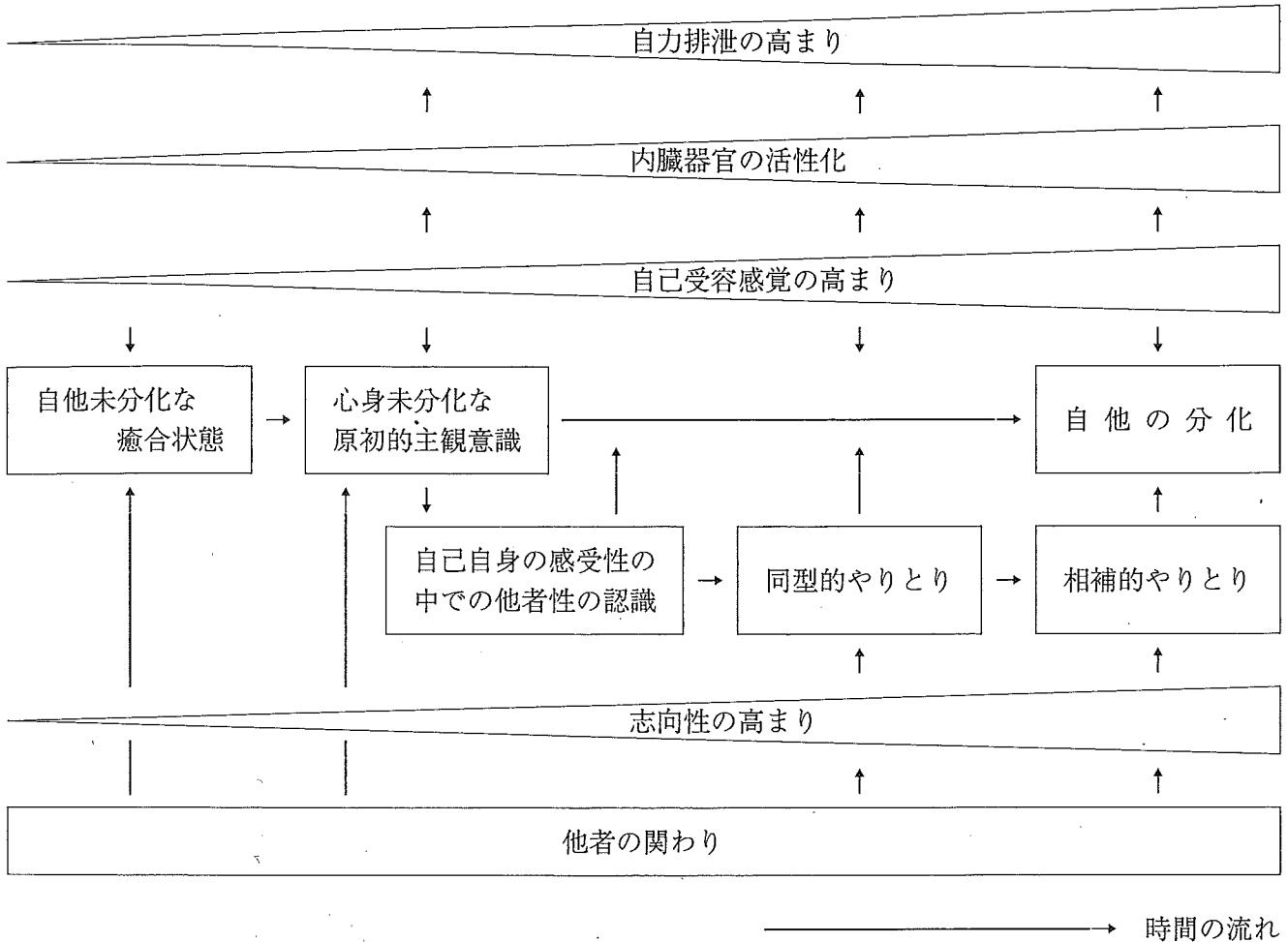


Fig. 1 A児における立位での踏みしめと外界との応答の関連についての仮説的結論

ものであった。さらに、A児の変容のプロセスは、やまだ(1996⁷⁾)が、Wallonの考えに依拠しながら、コミュニケーションと身体について論ずる中で述べているように、「乳児が発達するという事は、周囲の人々と一体で「社会的」すぎることから、人々と離れて〈ここ〉で動かない自己を確立する方向へ発達する」プロセスでもあった。

今後は、これまでのA児の外界との応答をさらに拡大し、自発性をさらに引き出すようなアプローチを行っていきたいと考える。

文 献

- 1) 浜田寿美男(1986)ワロン, H. 村井潤一編 別冊 発達4 発達の理論をきづく. ミネルヴァ書房, 59-104.
- 2) 浜田寿美男(1994)ピアジェとワロン. ミネルヴァ書房.
- 3) 亀谷和史(1987)H. ワロンの初期発達理論—〈姿勢機能 (システム)〉概念を中心に—. 東

- 京大学教育学部紀要, 27, 183-193.
- 4) 亀谷和史(1989)H. ワロンの発達理論研究ノート—機能領域論・感覚区分論・模倣論をめぐって—. 東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室紀要, 15, 73-87.
- 5) 〈子どもの生活世界〉研究会(1986)自我形成論—⑦ 一応のまとめ その1 間身体性について—同型性と相補性—. 発達, 27, ミネルヴァ書房, 102-113.
- 6) 園原太郎(1961)行動の個体発達における連続性の問題. 哲学研究, 41, 1-19.
- 7) Wallon, H. (1956) Niveaux et fonctions du moi L'Evolution psychiatrique. I. (浜田寿美男編(1983)ワロン/身体・自我・社会. ミネルヴァ書房, 23-51.)
- 8) やまだようこ(1996)共鳴してうたうこと・自身の声生まれること. 菅原和孝・野村雄一編 叢書 身体と文化2 コミュニケーションとしての身体. 大修館書店, 40-70.